



「光り輝く」 農政学の再構築を

政策研究大学院大学教授 原 洋之介



現在、米の減反政策やオーストラリア等との自由貿易協定を巡って声高に農政論争が展開している。経済のグローバル化に押されて、国内経済構造のより一層の効率化を目指す「構造改革」政策がここ十数年採用されてきた。だが、このような効率化一本の政策がほぼ必然的にもたらす格差が無視しえなくなり、再び自由と平等という対立しうる2つの基本政策をどう調和させるのかという課題が問われるようになった。そして農業政策は、この基本問題に関わるため、現実的になった政権交代とも絡んで、今論争が大きな注目を浴びているのである。

ところで20世紀はじめにも、当時農政官僚であった柳田國男が「吾人は必ずしも有力なる農業保護説の天下に称

号せらるるを欲するものにあらざ」として突きつけた「中農養成」を巡る論争があった。土地の交換分合や営農資本供与を実施する主体として「進歩協同相助」の伝統を保持している村内に産業組合を組織して「わが国農戸の全部をして少くも二町以上の田畑を持たしめたしと考う」。柳田のこの論は、彼より一回り年長の横井時敬などが勧めていた、20世紀はじめからの保護政策下での米増産一本やりの明治政府の農政を痛烈に批判したものであった。

明治30年代には、維新以降の産業化が、前近代の要素や歴史遺産を色濃く残している農村・農業に大きな問題を顕在化させはじめていた。そのためであるう、多くの社会科学を志す者が農業・農村問題に取り組み、我が国で農

業問題に関する社会科学的分析が誕生した。この農政論は、江戸時代の農政論を踏まえながらも、西欧の経済学や社会科学を取り入れたという意味で「近代科学的な」政策論であった。そして、新渡戸稲造『農業本論』横井時敬『農政経済要論』、河上肇『日本尊農論』そして柳田國男『農政学』など現在でもその価値が減じていない著作が上梓されている。「あらためて年譜を繰ってみると、新渡戸と横井が三十歳の後半、柳田や河上はまだ三十歳を出たばかりの年齢であった。早熟の秀才たちが農業をめぐる学問のフィールドに集まっていた珍しい時代であった」（渡部忠世『農は万年、亀のごとし』）。勿論、資本主義の浸透と農業との関係をどう捉えるかについて、彼らの間に

は大きな意見の対立があった。だが間違はなく「まさに明治三十年代初頭の農政学は、ピカピカ光り輝くような新品の学問だった（井出孫六『柳田国男をあるく』）」のである。

政局にも左右されて農政の混迷が表面化している現在、日本農業の再建策を巡って、輸出産業化の可能性といった論点も加わって激しい論争がおこなわれている。特に株式会社への参入規制撤廃まで含めた個別農家経営の成長戦略が議論の焦点になっている。いうまでもなく、こういった戦略構想は日本農業再建策の構想にとって不可欠な論点である。だが同時に私は、産業としての農業という論点が軽視されはじめていることに大きな危惧を感じているのである。我が国の農業経済学説史を紐解いてみれば、ほとんどの論者は産業化の核となった近代的製造業と、前近代からの歴史を背負った農業とが、産業として決して同質ではないことを重視していたことがわかる。労働市場の未発達故に農業内に堆積していた過剰就業者の農外への移動で経済全体の生産性が上昇し、明治以来の高度経済成長が実現した。その一方で、土地市場が不完全なままであったため、農家間の生産性・所得格差の解消が実現しえなかった。こういった分析を提示し

た大川一司などが、その代表であろう。

吉川洋が『現代マクロ経済学』で指摘しているように、アメリカのマクロ経済学においては最近、基本的には歴史的な形成体である産業という概念が追放されてしまった。その理由は、産業が直接的には最適化をおこなう主体ではないため、ミクロ経済主体の行動を軸とする経済学ではそういった曖昧な概念は不要な飾り物に過ぎないとされたからであろう。だが本場に我が国農業の分析において、産業概念はもはや不要なのであろうか。大企業中小企業間の大きな格差は、貿易や資本移動がグローバル化したとしても、日本経済の労働・資本市場にいまだ無視しがたい不均衡が存在していることの現われである。また、成長力があるとされる個別の農業経営にとって「資本制限」がなくなったとはいえない。さらに、特に土地利用型農業における個別経営の成長戦略を構想するに際して、産業としての農業の特性や水資源管理にかかわっている農村社会のあり方を無視することは許されないであろう。

現在改めて農政論争を論じる時も、大正初期の小農保護論争や戦後高度成長期の農業近代化を巡る論争等、過去1世紀の間、現在とまったく同じ問題を巡って論争が繰り返されてきたこ

とを忘れてはならない。その時々で国民経済に占める農業の重要性は減じてきていたが、農政論争は経済のグローバル化に対応するため小規模家族経営農家の生産効率化をどう実現させるのかというひとつの問題を巡って展開しており、現在もまたこの基本問題が問われている。そうである以上、現在もなお世界の多様な農業との対比の上で、我が国農業の個性を冷静に見つめることが不可欠なはずである。

詳細を論じる余裕はないが、過去1世紀の間先達たちは、日本農業の歴史経路や個性を的確に取り入れた農業経済学を追及し続けてきたのだ。柳田国男も『時代と農政』で「日本では聖徳太子・吉備大臣の昔から舶来の学問でなければ価値がないように思う悪い癖があり」「今日の時節に必要なのは西洋の農業経済学の普及ではなく、日本の農業経済学の開発である」と書いている。大層迂回的になろうが、100年前の柳田のこの発言を改めて噛み締める以外に、農政論を再度1世紀前のように光り輝かす途はないのではなからうか。